校内研究への支援の在り方に関する研究
－教員一人一人の授業改善につながる校内研究を目指して－

主　幹・指導主事　渡邉昭二郎　　主　査・指導主事　今村恵美子
副主査・指導主事　萩原　義晃　　副主査・指導主事　渡邊　信也
副主査・指導主事　小林　裕直

キーワード　ニーズに応じた校内研究支援　　分析結果を生かした授業改善
シートを活用した授業づくり支援

Ⅰ　主題設定の理由

総合教育センター（以下本センター）では，学校現場のニーズに応じた校内研究支援を進めることを目的とした「研究支援」に取り組んできた。これは，本センターが学校に対してどのような支援を行うことができるかを探るものである。小学校チームでは今年度も学校教育支援を目的とし，研究推進校と協同的に「授業づくり・学校づくり」を推進する実践研究を行っていくこととした。

校内研究は，児童の教育のために，教職員が協同で行う研究である。児童の実態を適切に把握し，目指す児童の姿を具現化するにはどうすればよいかが研究の中心となる。しかし，教育課題が多様化・複雑化する教育現場において，校内研究の進め方に多くの学校が様々な悩みを抱えており，研究の成果が教員一人一人の授業改善につながっていないケースが見られる。そこで本研究では，研究推進校と互いに意見を出し合いながら支援の在り方を探ることを通して，主体的・対話的で深い学びの視点からの授業改善につながる校内研究に着目した。

小学校チームは，令和４年度からの研究推進校である北杜市立高根東小学校に加え，令和５年度に新たな研究推進校として大月市立鳥沢小学校とも研究を進めることになった。同一研究推進校で複数年にわたり協同研究を進めることで，より系統的・計画的な実践を探ることを意図している。具体的な取組としては，各校の要望を踏まえ，本センターのシンクタンク機能を生かした支援を行い，研究推進校における校内研究の活性化を目指す。更に，拡大校内研究会及び研究大会等において研究内容を県下に広げ，各学校の校内研究の活性化につなげるとともに，各学校への有効な教育支援の在り方を探りたいと考えた。

Ⅱ　研究の目的

研究推進校からの要望に加え，全国学力･学習状況調査（以下全国学調）の早期分析や専門的知見を有する山梨大学のアドバイザーとの連携等が，研究推進校の校内研究に対してどのような成果と課題をもたらしたかを検証することで，各学校の校内研究への支援の在り方を探る。

Ⅲ　研究の方法

- 校内研究の運営に関する連絡を密にし，管理職や研究主任と連携する。
- 学習会，学習指導案検討，研究授業，研究会を通して，情報提供や指導・助言をする。
- 各種学力調査の分析結果を生かした授業改善の在り方について提案する。
- 各種シートを活用し，授業改善に向けた具体的取組につながる支援を行う。
- 拡大校内研究会やセンター研究大会において，研究の成果を発信する。
- 検証の手立てとしてアンケートを実施し，教員の変容を把握する。

Ⅳ　研究経過

１　センター研究日

４月 12 日（水）オリエンテーション
４月 20 日（木）センター研究
・研究計画の検討，　支援内容の確認
５月 16 日（火）研究計画発表会
５月 22 日（月）山梨大学連携教育研究会
６月 21 日（水）センター研究
・１学期の支援内容の検討
７月 18 日（火）センター研究
・２学期の支援内容の検討
９月 21 日（木）中間発表会

10 月 19 日（木）センター研究
・２学期の支援内容の検討
11 月 16 日（木）センター研究
・３学期の支援内容の検討
11 月 21 日（火）山梨大学連携･教育研究会
12 月 14 日（木）センター研究
・センター研究大会，研究紀要の分担
１月 16 日（火）センター研究
・所内発表会の検討
１月 30 日（火）所内発表会
２月　７日（水）センター研究
・研究紀要の検討
２月 27 日（火）センター研究大会
３月　５日（火）来年度の方向性の検討

２　学校訪問

高根東小	鳥沢小
４月 17 日（月） ・委嘱状交付 ・打ち合わせ ６月 19 日（月） ・研究授業 ７月 10 日（月） ・一人一実践授業 ７月 14 日（金） ・一人一実践授業 ７月 24 日（月） ・学習会 ８月　８日（火） ・学習指導案検討 ９月 11 日（月） ・研究授業 10 月　５日（木） ・一人一実践授業 10 月 11 日（水） ・一人一実践授業 10 月 24 日（火） ・拡大校内研究会 10 月 26 日（木） ・一人一実践授業 11 月　１日（水） ・一人一実践授業 11 月 30 日（木） ・一人一実践授業	４月 26 日（水） ・委嘱状交付 ・学習会 ・打ち合わせ ５月 24 日（水） ・学習会（自校採点） ６月 14 日（水） ・学習会 ８月 24 日（木） ・学習指導案検討 10 月　４日（水） ・学習指導案検討 10 月 18 日（水） ・研究授業 10 月 20 日（金） ・一人一実践授業 10 月 26 日（木） ・一人一実践授業 11 月 15 日（水） ・一人一実践授業 11 月 21 日（火） ・一人一実践授業 11 月 22 日（水） ・拡大校内研究会

Ⅴ　具体的な取組

小学校チームでは，２校の研究推進校を指定し，研究支援を行ってきた。それぞれの学校の要望に沿った支援を行い，校内研究が活性化されるように努めた。本センターの機能を活用しながら学校全体の授業力向上を目指し，教員一人一人の授業改善につなげるとともに，年間を通して校内研究の目的が意識できるように支援を行った。その研究支援が研究推進校のニーズに応えるものになるよう，管理職や研究主任と相談の上，支援計画を決定した。

１　研究推進校のニーズに応じた支援

（１）鳥沢小学校（研究推進校１年目）

鳥沢小学校は推進校１年目ということで，管理職や研究主任とどのような支援が有効であるか丁寧に検討を進め研究支援を行った。鳥沢小学校が年度始めに課題としていたことは，「読解力向上」と「効果的なＩＣＴ活用」であった。研究主題である「自ら考え，共に学び合う児童の育成～読解力向上を目指した授業改善を通して～」のもと，支援計画を立てた。

年度始めの校内研究会にはセンター指導主事も参加し，センター研究や研究推進校としての具体的なイメージを全職員と共有した。そして，鳥沢小学校の課題である「効果的なＩＣＴ活用」に関して，鳥沢小学校が校内研究で中心に進める国語科を中心に，本センター指導主事が講師となり学習会を行った。５月には全国学調の自校採点学習会を実施する中で，自校の課題を見つけ，日々の授業改善へとつながるよう支援を行った。６月には「読解力を育む国語科の授業実践について」という内容で，山梨大学の古屋啓一教授を講師に招き学習会を行った。

鳥沢小学校では，１学期に各学習会で学んだことを生かして，２学期は一人一実践や研究授業に取り組んだ。一人一実践では，センター指導主事が学校の要望を受け，当日の授業を参観し，指導・助言を行った。拡大校内研では，鳥沢小学校で明らかになった課題に対して，その解決に向けた授業提案となるよう指導案検討等で支援をした。このように学校の課題や要望に沿った研究支援を進めた。

ア　学習会の実施（国語科におけるＩＣＴ活用学習会・読解力を育む国語科の授業実践学習会）

４月に「効果的にＩＣＴを活用した授業実践について～国語科の授業実践例～」をテーマに学習会を行った。本センター指導主事が講師を務め，文部科学省及び県教育委員会から出されている資料や実践例を基に学習を進めた。学習会では，ＩＣＴを使うことが目的とならないこと，授業構想を大切にすることを確認した。

６月に「読解力を育む国語科の授業実践について」をテーマに学習会を行った。山梨大学の古屋啓一教授を講師に，読解力について理論と演習を交えて学習を進めた。学習会を通して，ＰＩＳＡ型読解力を意識した授業づくりや表現（外化）がもつ力を利用すること，多くの引き出しをもって柔軟に活用すること，クリティカルシンキングの意識をもつことの大切さを学習した。

イ　自校採点学習会

本センターでは，以前より，全国学調実施後に自校採点を行い，各学校での授業改善に活用することを推奨している。今年度は，鳥沢小学校において，５月に全教員で自校採点及び分析を行った。その際，センター指導主事は採点のポイントを示したり，教員からの疑問に答えたりした。

自校採点を行うことによって，全国や山梨県などの結果の報告だけでは見えてこない，目の前の児童の実態を明らかにすることができる。また，実際に教員が採点をすることにより全国学調の出題意図を把握することができ，そこから児童にどのような資質・能力を身に付けさせることが求められているのかを知ることができる。

鳥沢小学校の教員からは，自校採点を行った結果,「児童個々のつまずきと学級の課題を掴む上で必要である。」「本校の課題を把握し，授業に生かしていく。」という声が聞かれた。全教員で課題を共有し，学校全体で授業改善に取り組むきっかけとなった。

ウ　拡大校内研究会（国語科）

11 月 22 日に第２学年の国語科において研究授業及び事後研究会を行った。実施単元は「せつめいのしかたに気をつけて読み，それをいかして書こう」，教材名は「馬のおもちゃの作り方・おもちゃの作り方をせつめいしよう」である。昨年度，鳥沢小学校が実施した学力調査の結果から,「読み取りや目的に応じて内容を捉えること」に課題が見られた。また，今年度，全国学調の自校採点でも同様の課題が見られた。

そこで，児童が目的に合った情報を読み取ったり，整理したりすることでよりよい説明文づくりができるよう，本単元を構想した。

（ア）実際の授業

導入では，掲示を活用して前時の学習を振り返り，つながりを示してから，本時にどのような学習活動を行うかを児童に考えさせた。そして，2の段落には「馬のおなか・首・せなか」の作り方が書いてあることを全体で共有し,児童がめあて「2のだんらくにある作り方がよくわかるせつめいのくふうを見つけよう」を明確に捉えられるようにしていた。

展開では，学習活動の手順を確認し，児童に前時の学習を想起させながら「くふうを見つける」上でのポイントを示して，活動に入った。「ちょうせんタイム」として，「①ペアで丸読み」「②文に線をひく」「③線をひいた理由を書く」という手順で活動を進めた。児童一人一人が，前時の学習を生かして取り組む様子が見られ，線を引いたり理由を書き込んだりしていた。そして，グループでの伝え合いの際には,児童が「なるほど」「そうか」と思ったところに赤い線を引かせ，相違点を確認させた。続いて，全体発表を行い,「なるほど」「そうか」と思ったところを共有した。発表の際には，電子黒板を活用し，児童が文章を示しながら理由を説明できるようにしていた。児童の発表に対しては,「同じ場所でも違う理由があるか」と問いかけることで複数の考えを引き出したり，発表に対して「どの言葉から」と問い返して「次に」という言葉に焦点化したりしていた。また,「見つけた工夫だけで作れそうだね」と揺さぶる言葉がけをして，児童が考えを深められるようにしていた。

まとめでは，めあてを確認してから,「作り方がよくわかるように」の後に，どのようなことを書くと作り方がよくわかるかを児童に考えさせた。児童の発表を基に,「じゅんじょがないと，作るじゅんばんがわからない」「『あわせる』『むき』がないと，やることがわかりづらい」とまとめた。そして，次時の見通しをもたせてから，学習感想を書かせた。本時に発見したことや知ったことを数

名の児童に発表させることで，わかったことや次時に生かしたいことを全体で共有していた。

（イ）事後研究会

まず，対話リフレクションの手法を用いて，授業の振り返りを行った。授業者の意図やこれまでの取組の様子，討議の視点につながる課題等を全体で共有した。続いての全体質疑では，参加者から複数の質問が出され，さらに詳しく指導の意図や前時とのつながりを確認していた。

グループ討議では,「文章の中の重要な語や文を選び出すとともに，時間的，事柄の順序も考えて内容の大体をとらえることができていたか」を討議の柱として，Ａ～Ｅの５グループに分かれ討議を行った。明確な目的意識が児童の主体的な取組につながっていた点，グループでの対話，効果的な掲示物やワークシートの活用等についてが成果として挙げられた。授業者が課題とした児童の「順序」への気付きの引き出し方については，「まず」「次に」という言葉だけでなく文章全体を広く見渡すことや全体に目を向けられるような発問の工夫，写真を手掛かりとすること，実際に文章を作る体験等が,「作る順序通りに書くと伝わりやすい」という気付きを引き出すために有効であるという意見が出された。

討議後，山梨大学の河野瑞穂客員教授，同大学の古屋啓一教授から指導・助言をいただいた。河野客員教授からは，目的意識が明確で児童が問題意識をもって意欲的に学習に取り組むことができた点，自力解決が大切にされていた点等を評価していただいた。また，横断的に読むことや実際に文章を作る体験は，児童の新たな発見につながることをご教授いただいた。古屋教授からは，まとめとめあての整合性を図ること，本文の言葉「つぎに」「一つ」「もう一つ」「のこったもう一つ」を取り上げて「この言葉があると作る順序がわかるので，順序がわかる言葉を書く」というまとめができることをご教授いただいた。また，表現力に関連して,「無駄なく正確に伝えられるようにするにはどうすればよいか」という問題を用意してくださり，参加者が演習を通して表現力について考える機会をもった。

（２）高根東小学校（研究推進校２年目）

高根東小学校は，研究主題を「たくましく学ぶ児童の育成」，研究副題を「つなぐ学びを通して」とし，研究を進めた。

研究推進校１年目は，研究主題に設定した児童の姿を具現化するために，本センターからどのような支援が有効であるかを研究主任と丁寧に検討した。その中で，全国学調の自校採点学習会を実施し，自校の課題を把握し，一人一実践の授業改善につながるよう支援してきた。研究推進校２年目は，管理職のリーダシップの下，校内研究で目指していく方向が共有されていた。そのため，本センターに要望する支援内容が具体的かつ明確であった。学校が主体となって研究を進め，センター指導主事がよりよい研究になるように支援する体制を整えることができた。

高根東小学校は,「校内研究会の活性化」及び「ＩＣＴ活用」に課題があったため，今年度の支援の方向性として，校内研究会の運営支援やＩＣＴ活用について学習会を実施することを確認した。また，一人一実践では，昨年度同様，センター指導主事が算数科，国語科等を中心に指導･助言をした。日常の授業改善が学校全体としての授業力向上につながる取組となった。高根東小学校のアンケート結果からも,「一人一実践での指導が非常にためになるものであった。日常の授業と校内研究とのつながりや他の教員の指導とのつながりを指導していただき，年間を通して学びや研究への意欲を継続することができた。」との感想をいただいている。

ア　事後研究会における運営支援

高根東小学校では，研究授業の事後研究会において，グループ協議での話し合いを深めたいという課題意識をもっていた。そこで，６月に行われた事後研究会では，センター指導主事がファシリテーターとして３つのグループそれぞれの進行役を務めた。進行役の３人は，グループ協議において授業改善の手立てまでを協議の中で共有することを確認した。実際の協議では，授業観察の視点を基に，手立てごとに意見の分類と分類した項目へのネーミングをした。どのグループも活発な協議が展開されていた。

高根東小学校の教員からは,「このような形態でのグループ討議は初めてだったが，客観的な立場で進めてもらうことで，話し合いがぶれずに進み，新たな見方や考え方の獲得へとつながった。」「10月の拡大校内研究に向けての見通しをもつことができた。」という声が聞かれた。

イ　学習会の実施（ＩＣＴ活用学習会）

高根東小学校では，校内研究会を活性化するための取組として，事後研究においても積極的にＩＣＴを活用する計画を立てた。そのために，本センターでは，７月にＩＣＴ教育支援センター指導主事による学習会を実施した。教員がＩＣＴ端末の使い方に慣れるというだけでなく，授業や校内研究会等での活用方法について体験する機会となった。学習会に参加した教員からは，「ジャムボードは新たな取組だったが，難しさも有効性もどちらも学ぶことができた。」，「今では低学年もタブレットでノートを撮り，話し合いに生かしている。」との感想をいただいた。

また，高根東小学校では，新たな試みとして，教員が授業参観中に課題や成果を端末の付箋機能を用いて書き込むという方法を取り入れた。この方法は，参観と同時に端末上のシートに付箋を付けていくので時間短縮につながり，研究討議の時間を十分に確保できるという利点がある。この取組は，９月の研究授業，10 月の拡大校内研究会でも取り入れ，回を重ねるたびにブラッシュアップしていった。

ウ　拡大校内研究会（算数科）

10 月 24 日に第５学年の算数科において研究授業・研究会を行った。実施単元はＡ「数と計算」領域の（５）「分数の加法，減法」である。総時間数 12 時間のうち，３時間目を本時に設定し，「異分母の分数の減法の計算の仕方について考え，説明することができる」という目標の下，研究授業を行った。研究支援として，指導案検討やＩＣＴを活用した研究会の模擬運営に，算数科を中心としたセンター指導主事が参加し，指導・助言を行った。

（ア）実際の授業

まず，本時の問題「1/4L の牛にゅうと，3/5L の牛にゅうがあります。ちがいは何Ｌですか。」を提示した。問題に対して「何算で求められるか」「２つの分数を比べて気づくことはないか」を問うことで，めあてを具体化し，本時のめあて「分母がちがう分数のひき算の計算の仕方を考え説明しよう」を確認した。

次に，10 分間の自力解決を行った。高根東小学校ではこの時間を主体的解決と呼び，個人，ペア，グループを自由に児童が選択しながら交流できるようにしている。本時においても様々な形態で解決を進めたり，考えを比較したりしていた。その中で，児童が考えた方法は正答である分母の最小公倍数で通分をして計算する方法，それを数直線図で表し計算する方法，計算過程を言葉で示し考える方法などが見られた。数名は手が動かず，解決が進まない児童が見られたが，友達の考えを見たり，ヒントをもらったりしながら努力していた。

そして，全体検討に入った。まずは立てた式の確認を行った。児童からは 3/5－1/4 の正しい式が挙げられた。減法を立式する際，問題文に出てきた順に数値を並べて立式してしまうという実態があったことから，問題文で登場させる数値の順序を意図的に入れ替え，提示したが，多くの児童が大小関係を考えながら立式することができていた。しかし，これまでの実態を考え，「1/4－3/5 の式はどうか」と揺さぶりをかけ，それぞれの液量を図に表しながら大小関係を確認させた。式を明らかにしたあと，計算方法の検討に入った。

計算方法の検討では多くの児童からの挙手があったが，そのうちの一人の児童ＫとＴ２である授業者Ｂを指名し，考えを板書させた。児童Ｋの考えは 3/5－1/4 を 12/20-5/20 とし，正確に通分した正答の考えで，授業者Ｂの考えは 3/5－1/4 を 3/20-1/20 とし，分母を共通な分母にしたが分子をそのままにした誤答の考えであった。２つの共通点を問い，分母を 20 にそろえていることを確認し，「２人はどうやって 20 を見つけたのか」方法を問うた。すると，既習である異分母のたし算の学習を手掛かりに，５と４の公倍数から見つけたことが共有された。その後，授業者Ｂがなぜ誤答なのかを検討し，同値分数を見つけるときは，分子・分母の両方に同じ数をかけなければならないことを共有した。そして，3/5 と 12/20 が本当に等しいのかを授業者が用意したリットルます図をモニターに示しながら確認した。

最後に，めあてに立ち返り，授業を振り返りながら「分母がちがう分数のひき算は通分をして計算すればよい」とまとめを行った。そして，授業感想を書き，授業を終えた。

（イ）事後研究会

研究会では，研究討議に先立って対話リフレクションを行った。授業者の意図をメンター役の教員と問答形式で示すことで，普段の授業の様子と本時との違いや，力を入れた手立てである主体的解決の手ごたえや課題などが伝えられた。討議は，

Ａ～Ｆの６グループに分かれて行った。グループ討議の中で共通していた議題は主に２つであった。１つ目は主体的解決後に行う全体検討の在り方について，２つ目は主体的解決において交流ができない児童や解決が進まないＣの児童への手立てについてであった。１つ目については，主体的解決の場が個別最適な学びへとつながっていた点が成果として挙げられた一方，全体検討では主体的な学びが薄れてしまっていたという意見が挙がった。主体的解決を行った後の全体検討では，授業者は何をすべきか，今後検討していく必要がある。２つ目については，掲示物やＩＣＴを活用していくこと，対話の経験を積ませながら対話の幅を広げていくことが重要になると意見が挙がった。特に，板書や既習事項をクラウド上に蓄積し，それを児童が自分の使いたいときに取り出せるような環境の構築について多く意見が出されていた。他にも全体検討における誤答の取り扱いや，リットルます図を取り上げるタイミングなども挙げられていた。

討議後，山梨大学の小尾一仁客員教授，同大学の角田大輔准教授から指導・助言をいただいた。小尾客員教授からは，校内研全体に関わる助言として，テーマに掲げられている「つながり」に関連した助言をいただいた。つながりには「絆型」「架け橋型」「結合型」の３つがあることを具体例をもとに紹介していただき，教員として児童のためにどのようなつながりをつくっていけるかが重要になることをご教授いただいた。角田准教授からは本時に関わる助言をいただいた。特に重きを置いていたのが誤答に関することである。誤答を価値あるものとして認識を深め，誤答を出してもよいという雰囲気をつくっていくためにも，誤答の根拠をもっと吟味すべきである。また，「3/5＝3/10＝3/15＝3/20」と「3/5＝6/10＝9/15＝12/20」を数値の変化だけで比較するのではなく，量として比較することで，明確に誤答が理解できたり，分数の量感が培われたりすることにつながっていくとご教授いただいた。

２　各種シートの活用

研究推進校の校内研究を支援するにあたり，これまでの研究で作成した資料である「明日の授業に生かすシート」と「授業メイキングシート」を今年度も活用した。

（１）「明日の授業に生かすシート」とは

これまでの研究の中で，授業研究をＰＤＣＡサイクルによって，一人一人の授業改善につなげることを提案してきた。その中で特に重視した，ＣからＡの過程に焦点を当てて作成した記述式のシートが「明日の授業に生かすシート」である。

（P. 13 **資料１**）

本シートには，Ｃにあたる「授業研究会」で明らかになった成果や課題，改善策を記述する項目，それらを実際に自分の授業にどのように生かすかを考え記述する項目，学校や学年で検討していきたいことを記述する項目を設けている。これらの項目を教員一人一人が継続して記述することにより，ＣからＡの過程を確実に結び付け，それぞれの具体的な授業改善，次のＰＤＣＡサイクルにつなげることを意図している。

ア　研究推進校での活用例

研究推進校では，年度始めの校内研究会において，上記シートの説明を行った。特に意識したい点として，研究授業を自分自身の授業に生かしていく視点をもつことを挙げた。そして，その実践のために「明日の授業に生かすシート」に記述することが大切であることを伝え，研究推進校での事後研究会後等に記述を実施した。

以下は，６月に実施された第４学年算数の授業研究会後の教員Ａの記述の一部である。

①本日の授業研究で明らかになった「有効な手立て」や「改善策」は何でしたか？
前時のつながりを意識して，自力解決ができるように仕組まれた問いかけや板書が有効であった。
②明日からの授業や一人一実践等で，どのように活用しますか？
前時や次時を意識した授業構成をする。
③今後，学校や学年として，どんなことを検討しておきたいですか？
系統性を教員が意識し，子供たちに意識させる授業づくり。

この教員の記述には「前時」という語が多く見られる。他者の実践を通して，本時だけではなく，前時や次時とのつながりを意識するようになったことがうかがえる。「前時とのつながり」に着目し，今後の授業実践の中で，系統性を意識した授業づくりについて取り組みたいという明確な視点を獲得したこともうかがえる。この視点は，教科・領域を問わず重要な視点だといえる。

また，今年度の本取組の中で特徴的であったことの一つとして，「研究推進校による本シートのアレンジ」ということが挙げられる。研究推進校の校内研究の主題として「つなぐ」ということを掲げていることを踏まえ，研究推進校で自発的に以下のように項目を設定していた。このように，設問について焦点化するなど，各校の実態に応じたシートの活用が可能である。

授業研究で明らかになった「有効な<u>つなぐ</u>手立て」や「改善策」は何でしたか？

イ 個々の授業に生かす

ここからは，実際の記述を提示しながら，実際の授業にどのように生かされたのかを示す。

以下は，「自分の授業にどのように活用していくか」に関連する記述を実施月別にまとめたものの一部である。

月	記述内容
6	対話の場面において，ペア・グループ構成をしっかりと行い，話し合いの目的を児童に示す。
	小グループでの話し合いの目的意識をしっかりもたせる。
	小グループでの話し合いでも，一方通行の発表ではなく，会話をして思考をつなぐこと。
	一人の考えを全体につなぐために，様々な手立てを使う。
9	対話の時間，協働的に学び合う時間など，どこでどう使うか，有効な時間を設定していきたい。
	学びを振り返ることができるような掲示物を作る。
	ペア学習やグループ学習など，お互いの考えを交流する場を設定する。 既習学習を活用しながら学習できる教室環境整備やノート指導の充実を図る。
	学習の振り返りや前時の確認をすぐにできるような学習掲示や教室の環境整備をする。
10	児童に委ねる授業を意識的に取り入れる。
	対話などの交流の場を様々な場面で取り入れていく。学習環境やノートなど児童が主体的に課題解決に取り組める環境づくりを進める。
	学習掲示を工夫して，既習事項を生かした学習ができるようにしていく。また，友達に説明したり全体で発表したりすることで学習を深め、児童に自信をつけさせていきたい。
	系統性を意識し，学習をつなげていく。

各授業研究会で明らかになった成果や課題を受けて個々の授業にどのように生かすかを考える様子がうかがえる。具体的には，６月の段階では，多くの教員が，つなぐ手段として，対話的な活動の必要性を感じるとともに，その目的を明確にすることの必要性を再認識した様子がうかがえる。９月になると，児童主体の課題解決に着目する記述が多く見られ，それを実現するための手段として，対話的な活動や掲示物等の環境整備を挙げる記述が多く見られた。さらに，10月の記述では，児童主体の授業づくりにおける効果的な対話的活動や掲示物の在り方について模索する姿勢がうかがえる。**Ⅴ－１－（２）高根東小学校**の取組で言及したような，前時までの学習内容の掲示物を活用した児童主体の授業づくりにつながった要因の一つとして，本シートを活用することによる確実なＰＤＣＡサイクルの実施ということが考えられる。

また，長期的に校内研究に関わることで，同一教員の変容をみることもできる。本シートの活用から実践へ反映させた教員Ｂの事例を以下に示す。

月	授業研究で明らかになった「有効なつなぐ手立て」や「改善策」は何でしたか？	明日からの授業や一人一実践等で，どのように活用しますか？
6	対話的な活動において，自由に考えを交流する場面と，話し合いの柱を意識させる場面の両方を使い分けることが大切だと感じた。	一つの考えだけではなく，様々な考え方を用いて問題を解くことで深い学びにつながるようにしたい。
7	児童に自由に考えさせる時間を確保し，手が止まったら一緒に考える。	児童が自由に対話したり取り組んだりする時間を十分に確保する。
9	全体で共有し，様々な考えをつなぐ。	子供のつぶやきを拾い，つなげていく児童主体の授業づくり。
10	自由に意見交換 誤答の扱い方 掲示物の有効活用	誤答から様々な考えを広げてく。 掲示物を有効に活用し，自己解決につなげる。

６月の「自由に意見を交流する」「柱を意識させる」という記述から，教員Ｂは，他者の実践から，対話の目的を再認識したことがうかがえる。授業研究会を通して，「対話的活動の目的や形態」に着目し，今後の授業研究の中で，学び合う授業づくりの手立てを検討していきたいという視点を獲得したこともうかがえる。そして，７月の記述は，自身が実施した一人一実践後に記述されたものである。「児童が自由に対話したり取り組んだりする

時間を十分に確保する」という記述から，児童が主体となるような対話的活動の在り方を模索し，実践に取り入れようとした様子がうかがえる。その後も，９月には，「子供のつぶやきを拾い，つなげていく児童主体の授業づくり」，10 月には「掲示物を有効に活用し，自己解決につなげる」という記述が見られ，児童が自ら課題解決する場面を大切にするとともに，課題追究場面の方法においても児童が自由に選択できるような授業づくりの必要性を，他者の授業実践から見出し，自身の実践に生かそうとＰＤＣＡサイクルを繰り返している様子がうかがえる。

ウ「明日の授業に生かすシート」の活用の有効性

校内研究支援の視点から，本シートの活用の有効性を３つに整理する。**２-（１）-ア研究推進校での活用例・イ個々の授業に生かす**に示したように，昨年度までと同様に，学習会や研究授業，授業研究会から，教員が学びや気付きを得ていたことを確認することができた。また，その学びや気付きが教員一人一人の授業改善に結び付いているか，どのように具現化されているかを知ることが可能であることがわかった。さらに，個々の教員の記述について継続的に見ていくことで，個々や学校全体の授業づくりへの意識や具体的取組の変容についても把握しながら支援を行っていくことが可能であることもわかった。

研究推進校にとって，本シートの活用は，研究授業を単発で終わらせるのではなく，その後の授業改善につなげるための有効な手法の一つとなっている。本シートは短時間で記述できることに加え，研究主題等を問わず，各校の校内研究に取り入れやすい。過去に活用した学校では，その後の校内研究で継続して活用したり，記述内容を全校で共有したりするなど，各校において自発的な試みが行われているという報告も受けている。前述したように，各校の実態に応じて柔軟にシートの項目を変更したり，実施方法を工夫したりすることができるので，研究推進校以外の小学校においても有効活用が期待できる。

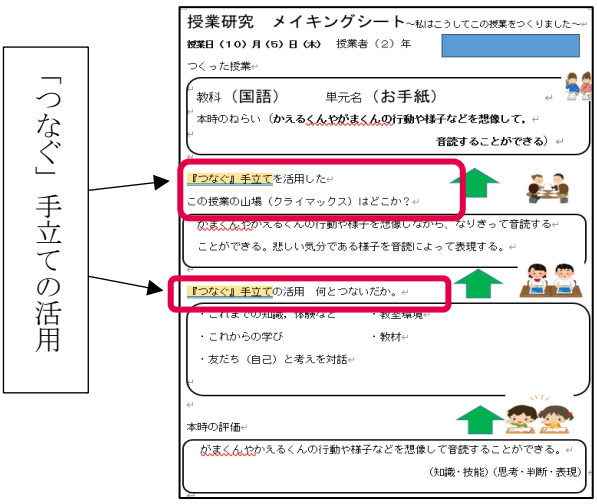
（２）「授業研究メイキングシート」とは

学校では，経験を積んだベテラン教員と経験が浅くても新しい視点で授業の組立てを考えることができる若手教員，そして中間点にいるミドル教員が存在している。本シートは，このような学校の教員構成を踏まえ教員同士が「つながる」ことを目的に昨年度作成した。研究推進校には，普段の授業の組立てに生かすと共に，それを教員同士で共有することで，教員自身や学校の財産となるように活用することを提案した。

ア 研究推進校での活用例

今年度の取組の特徴の一つとして，「明日の授業に生かすシート」と同様，「研究推進校による本シートのアレンジ」ということが挙げられる。高根東小学校では，校内研究の主題として「つなぐ」ということを掲げていることを踏まえ，研究推進校で自発的に以下のように項目を設定した。（資料２参照）

資料２：授業研究メイキングシート



授業者が本時のねらいを達成するために，手立てを明確にして授業を構想することは大切である。高根東小学校のように，研究主題に設定している「つなぐ学び」をシートに加え，学校全体で目指す方向性を共有することは，学力向上につながることが期待される。また，授業メイキングシートの内容は，指導と評価の一体化を図る授業づくりに向けて，授業で取り入れた手立ての有効性を検証する資料にもなる。

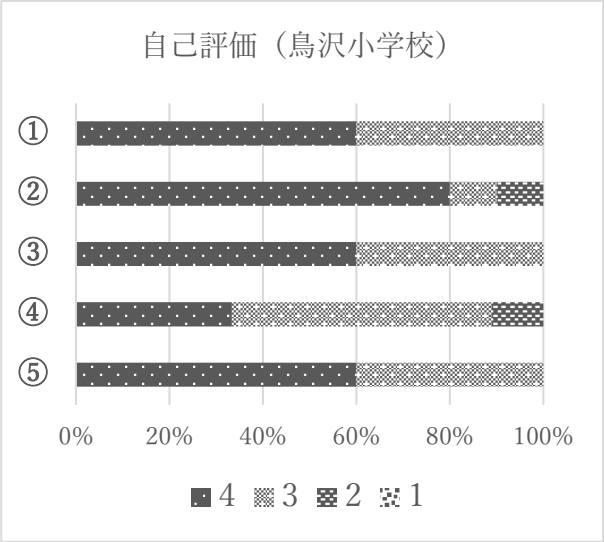
今後も，研究推進校から得た成果や課題を生かしながら，さらなる充実・改善につなげたい。

３　アンケートの実施

本研究の検証の手段として，２校の教員を対象に，12月にアンケートを実施した。

（１）アンケート項目及び結果（鳥沢小学校）

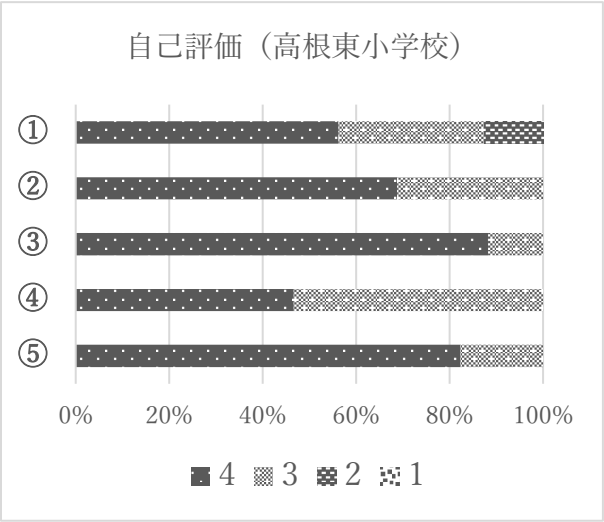
①校内研における研究授業の実施（指導案検討，研究会）
②校内研における学習会等の実施
・国語科におけるＩＣＴに関する学習会（４月）
・読解力を育む国語科の授業実践学習会（６月）
③拡大校内研の実施（指導案検討，研究会）
④各種シートの活用
⑤校内研への取組の姿勢（主体的に取り組めたか）
⑥センター研究に関する意見・感想
※①～⑤は充実度・満足度の自己評価尺度として「４：高い」「３：やや高い」「２：やや低い」「１：低い」で評価し，⑥は記述で回答



⑥記述回答より
・授業の組立てにおける視点がはっきりしたことで，自分が行う授業自体が変わったと感じている。また，授業をしていても，以前より楽しいと自分自身も感じることができた。
・センターの指導主事の協力のもと，今年度の校内研を充実させることができた。一人一実践の授業観察，指導助言をしていただいたことで，実りのある研修になった。
・対話リフレクションを行う事で、どんなことを目指して行ってきたのかなどの授業者のねらいが明確になっていい。

（２）アンケート項目及び結果（高根東小学校）

①校内研における学習会等の実施
・ＩＣＴに関する学習会（７月）
②校内研における研究授業の実施（指導案検討，研究会）
③拡大校内研の実施（指導案検討，研究会）
④各種シートの活用
⑤校内研への取組の姿勢（主体的に取り組めたか）
⑥センター研究に関する意見・感想
※①～⑤は充実度・満足度の自己評価尺度として「４：高い」「３：やや高い」「２：やや低い」「１：低い」で評価し，⑥は記述で回答



⑥記述回答より
・「つなぐ」学びを生かしながら子どもたちがたくましく考える，主体的に考える，個別から協働的な考えも生かしていく，といった方向で教師自らが，たくましく学んできた１年だった。教師が学ぶと，子どもに伝わる。子どもも授業が楽しい，わかる，できるところまで何とか一緒に考えていける，そういう姿が見られるようになり，私たちも研究している甲斐があった。
・研究会やブロック研究も活性化し，自分事として校内研に関わる意識が一段と高まったと感じている。研究を楽しめた。
・指導案づくりや指導の展開の仕方など，新たな取り組みにもチャレンジすることが多くあったが，どれも自身のためになるものばかりだった。ここからがまた新たなスタート，研究への熱意楽しさを持ちながら，これからも精進していきたい。

Ⅵ　今年度の研究の成果と課題

１　成果

今年度の成果として，研究推進校のニーズに応

じた支援を通して，研究推進校の校内研究が活性化し，授業改善の取組の一助となったことが挙げられる。

鳥沢小学校では，自校採点学習会により児童のつまずきを把握し，全学級担任が児童のつまずきの分析に基づいた研究授業，もしくは一人一実践授業に取り組んだ。また，対話リフレクションでは，授業者の指導意図を引き出したり，授業者自身に気付きを促したりすることで，校内研究を活性化することができた。

高根東小学校では，事後研究会における１人１台端末の効果的な活用や指導主事によるグループ討議のファシリテートにより，事後研究会の活性化を図ることができた。また，各種シートの活用については，自校の校内研の内容に沿ってシートをアレンジして活用することにより，教員自身が主体的に授業改善に取り組む姿が見られ，シートの汎用性の高さがうかがえた。

以上に述べた対話リフレクションや１人１台端末の効果的な活用は，２校が実施した拡大校内研究会でも取り組み，県内の教員に周知することができた。

最後に，研究支援の取組を通して，「研究を楽しめた」，「授業が変わった」と，研究推進校の教員が実感できたことは大きな成果といえる。

２　課題

以下の２点が課題として挙げられる。

１点目は，研究推進校と本センターとが校内研究で目指す児童の姿を共有することである。より具体的な支援内容を構築するためにも，研究計画の段階から研究推進校と関わっていく必要がある。

２点目は，各種学力調査の分析結果を生かした授業改善の取組である。各種学力調査の結果に基づき，具体的な授業づくりの提案を進めていく必要がある。

３　来年度に向けて

上記の課題解決に向け，研究推進校とより一層共通理解を図り，校内研究への支援を進める。

・新年度が始まり，校内研究のスケジュールが確定する前に，管理職や研究主任と打ち合わせを行う。可能な限り，前年度末に話し合いの場を設定する。
・研究推進校の研究内容に鑑み，各種学力調査の分析方法を学ぶ学習会の必要性を検討する。
・教員の授業改善につながる振り返りシートを提案する。

これらの取組を通して，県内小学校の校内研究の活性化に寄与していく。

【研究推進校】

大月市立鳥沢小学校	校長	蔦木 治彦
北杜市立高根東小学校	校長	田沢　憲

【山梨大学連携・教育研究会アドバイザー】

山梨大学	客員教授	小尾 一仁
山梨大学	客員教授	河野 瑞穂
山梨大学	教授	古屋 啓一
山梨大学	教授	藤原 裕一
山梨大学	准教授	角田 大輔
山梨大学	准教授	樋川 裕幸

【総合教育センター研究アドバイザー】

次長	小尾 俊彦
主幹・指導主事	外川　陽清

資料１　明日の授業に生かすシート

学んだことを一人一人の授業に取り入れる ～「授業研究の進め方」の活用～

氏名

授業後研究会

□**授業の振り返りから，成果や課題，改善策をもてたか**

・一人一人が自分の授業に取り入れたい手立てをもつ

・全校体制で取り組む授業改善に向けた手立てを共有する

本日の授業研究で明らかになった「有効な手立て」や「改善策」は何でしたか？

個々の授業研究へ

□**授業研究で明らかになった成果や改善策を，授業に生かしているか**

□**取り入れたことを振り返っているか**

・教師自身や児童の変容を見取る

□**全教員で取り組んでいるか**

・校内研で実践を報告する時間を設け，個々で取り組んだことを共有する

明日からの授業や一人一実践等で，どのように活用しますか？

今後，学校や学年として，どんなことを検討しておきたいですか？